
風のきざし

今井 祐一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風のきざし

【Nコード】

N3669B

【作者名】

今井 祐一

【あらすじ】

人里はなれた山奥の村、雌伏の時を過ごすこと幾年月。失われた栄光を取り戻すため、男は山をおりる。彼を支えた者たちとの、最初の出会いとは…『風雲の果て』前編

第1話：下山（前書き）

残酷な描写は全篇に渡って無いように書いてはいますが、物語の性格上そういう場面もないとは言えませんし、そう感じる方もあるかもしれません。そのときはどうかお許しください。

第1話：下山

いつまでもここに続ける訳にはいかないことは分かっていた。それは、ここに来たときから決まっていたこと。ただ、師匠と暮らしたこの村を離れられず、なんとなく二十年目の春を迎えてしまった。

春風に木々がかすかにざわめく。山の風はまだ少し冷たい。囲炉裏の火は絶やせない。

ふらり、と外へ出る。家というほどのものでもない、夜露をしのごう。たったそれだけでも、彼にとってはかけがえのないものなのであった。

何かの気配に気付いて振り返る。

「風彪」

声の主の姿は見えない。いつもそうだ。彼が姿を見せることはあまりない。ただ気配だけでその存在を主張する。いるのに、いない、矛盾した言い方だが彼にはそれが当てはまるのではないかと風彪は思わぬでもなかった。

「鄭範か、お前がわざわざ来るとは。何があった？」

鄭範は風彪に大陸の情勢をもたらす間者たちの長だ。滅多に自らここまで出向いてくることはない。そういう時は決まって何か大きなことがあったときだ。風彪はあまりいい気分がしない。

「この秘境も今日で終わりだ」

「何が来た？昌か？」

この村は今のところ特に税の徴収など受けてはいないが、昌という王国の領内にある。その昌は今、大陸最大にして唯一の帝国、第三帝国との戦争の最中である。

奥地にあるこの村に戦火が及ぶことはなくとも、戦費を少しでも捻出するため、昌が役人を派遣するというのはありそうなことだった。

こんなこと他の村人は知らない。昌や帝国すらおそらく知らない。風彪がそんな僻地^{へきち}にいながら外のことを知っているのは、鄭範達の働きのおかげだ。

「いや違う。山賊、流賊というべきか」

「山賊ごときの報せをおまえが持つてくるのか？」

おかしい。それは、この村にとつては事件であるにしろ、鄭範がわざわざ持つてくるようなものではない。鄭範の答えを待ったが、返事は返つてこない。都合の悪いときはすぐ黙る。

「まあいい、なぜここへ来る？」

一瞬の間があつて答えが返つてきた。

「もちろん、食料のためだ」

「それにしたつて、こんな山奥へ来ることはあるまい」

「知らん。俺がやるのは事実をつかむところまでだ」

「いいだろう、あとどれくらいで村に着く？」

「二刻（一時間）ほどだろう」

「分かった」

師匠が死んで三年間、人に武器を向けることはなかった。それも今日で終わりのようだ。名残惜しくもあつたが、それとは違う気持ちもまたあつた。

いつもと静けさの中、風だけはいつもと同じようにふいている。木々が、かすかにざわめく。その音は、自分の思いに似て揺れていた。

家に戻つて自分の背丈と同じくらいの棒を手にとる。なんの変哲もないただの木の棒、これがずっと風彪の得物だった。にぎるところが黒ずんでいる。この棒を、師匠と共に切り出したのはいつだったろう。

むこうが登つて来そうな場所に見当をつけて山を降りて行く。この土地の人間でない限り登れるような場所など知れている。近くにいたるはずの鄭範に声をかける。

「こつちだな？」

沈黙が返ってくる。たぶん間違いないだろう。どうやら鄭範は手出ししないつもりらしい。

森の中で腰を下ろして待つ。切り株がところどころにあって、時々村人たちがすわるために切り株の口をととのえているのだ。そういうところにすわって目をつむると、森の声が聞こえる。

急に森の気配が変わった。ずいぶんがさつな気配だ。森がざわつく。思っていたより遅かった。賊の中にはかなり組織的なものもあるらしいが、どうやらそういうあいではないようだ。立ち上がって方向を確認すると、一息に集団との距離を詰める。あと二十歩ほどのところで相手が武器を構えた。

「何だ、お前は？そこをどけ」

答えずにただ真っ直ぐ相手を見る。声を出したのが首領だろう。たいした腕ではない。他の者も武装はばらばらで、前にいる何人かだけがまともな武器を持っていた。それでも所々かけているのが遠目からも分かる。

「よっぽど死にたいらしいな。おい、野郎共やっちまえ」

打ちかかってくる。しかし先頭でかかってくる者たち以外は動こうとしない。あまり殺生せずに済みそうだ。

林昭は頭の声聞いて踏み出そうとしたが、何かに打たれたように足がすくんで動けなくなってしまった。

まるで幻を見ているようだった。相手は一步も動いていないのに、打ちかかっていった仲間は次々と倒れて行く。まるで、白い風が吹き抜けるようだ。瞬く間に二十人ほどが倒れた。逃げ出してしまいたかったが、一旦止まった足は動かなかった。

「同じようになりたくなければ武器を捨てろ」

林昭は持っていた槍を投げ捨てた。

鄭範は木の上から一部始終を見ていた。まず風彪の姿を認めた首

領が声を上げ、前にいた二十人ほどで打ちかった。

風彪は一人目を突き倒すと、右へ薙払って槍を振り上げた二人を倒し、左から来た一人を棒の反対側で打った。鄭範に分かったのはそこまでだった。

残りは一斉にかかつていったが気付いた時には風彪一人が立つていた。生きている者はない。風彪のまとう白衣には、一点のしみもない。

はじめてこの男が恐ろしいと思った。

思った通り一瞬で片は付いた。残った五十人ほどは一人が武器を捨てると皆一斉に武器を捨てた。

「お前たちにも故郷があるだろう。二度と山賊などにはならず、真面目に暮らせ」

そう言つて背を向けた。

「ちよつと待て。それは無理というものだ」

苦笑しながら鄭範が姿を見せた。鄭範が呼ばれもせずに二回も出て来るのは珍しい。姿を見せるのも、だ。

「こやつらが進んで賊に身を落としたとでも思っているのか？いくら世間知らずとはいえ、お前もそこまで馬鹿ではあるまい。少し考えれば帰る場所などないことぐらい分かるだろう」

世間知らずと言われても腹は立たない。鄭範に比べて自分が世間を知らないのは仕方ない。ここ十年近く同じことを言われ続けている。

「ではどうしろと？」

「それを考えるのはお前だ」

何が必要なのか。彼らが二度と賊に身を落とさないためには。

ほとんど雨露をしのぐ以外に使い道のない庵だったが、書物は多かった。書庫が庵の半分近くを占めていた上、書庫のほうが雨漏りしにくかったくらいである。雨の日はほとんど書庫に入つてすごしたし、そうでなくても毎日何か読んでいたから知識には事欠かない。

しかし、書物から得られるのは知識ばかりで、こういう場面で求められる機転を身につけることはできない。

民を落草させない、ということとは政治が受け持つ分野である。なんとあつたか。倉稟^{そうりん}実^みちて則^{すなわ}ち礼節を知り、衣食足りて則^{えいじよく}ち栄辱を知る、という一節がまず頭に浮かんだ。生活にゆとりができれば道徳意識は自然と高まるということを意味している。まず必要なのは生活の保障だ。

そこまで考えて思い当たることがあつた。

「鄭範、いつか俺がここを出て行く時には必要なものは全て揃えると言つたな」

「ああ、何が必要だ？」

「三十人が半年暮らせるだけの食糧が欲しい」

「分かつた、手配しよう」

「それと路銀をいくらか」

「分かつた、三日待て」

武器を捨てた三十人の方へ向き直ると、彼らは無言で、脅えた顔つきでこちらを見ていた。さっきの今では仕方ないと思いつつ、そちらへ話しかける。

「改心するなら、村で暮らせるよう村長に掛け合おう。故郷へ帰りたいものも、最低一年の間ここで働け。罪の償いだ。気に入らない者は去るがいい」

それだけ言つと背を向けて歩き出した。いつの間にか鄭範は姿を消していた。

林昭たちはそれから三日、野宿して過ごした。賊といわれる身分になって野宿には慣れたと思つていたが、村の中くらにいると晒さらし者になつているようで居心地が悪い。村人たちの突き刺すような視線が痛い。

四日目の朝、風彪が三十人を集めた。

「村でお前たちを預かつてくれることになった。ただし住むところ、

耕す畑は無い。一から作れ。私はここを離れるが、絶えず私の『目』が見ている。おかしいことはするな」

林昭はなんとなく落ち着かなくなった。今まで悪事を働いてきた身で、こうして居場所を与えられている。本来なら不満などないはずだった。しかし、どこかに違和感を感じていた。

風彪が、来た。はじめて見た時と同じような棒の先に荷をくくりつけている。荷は、なぜかとても細長い。つるしてあるのではなく棒に縛りつけてある。背には箆へらがある。弓でも入っているのだろうか。しかしその矢は、林昭が今までに見たどんな矢よりも長く太い。出て行くというのは本当なのだろうか。それにしてもあまりに少ない持ち物だと、その場にそぐわないことをぼんやりと考えていた。

風彪は林昭たちに背を向けて歩いていく。その背中を木々の間からみれる朝日がまだらに染める。その色はまるで、雪のようだった。風彪が出て行く。そう思ったとき、自分の違和感が何だったのかによりやく気付いた。

転げるように前へ飛び出すと、地に手をつき、頭を下げた。振り向き、訝しげに自分を見下ろす風彪の顔がまたまだらに染まる。

「私を連れて行って下さいませんか」

その眼に、一瞬光がよぎった。たんなる陽の光だったのかもしれない。しかし林昭にはその光が風彪の中から発せられたように見えた。その光を頼りに、もう一度請う。

風彪が林昭の思うところには連れて行けないと言った。旅には目的があり、自分の従者になるからには、それなりの腕も身につける必要があるとも。いつ命を落とすかも知れぬと。

そんなことは承知の上だ。落草した自分にもう一度生き直す機会を与えてくれた。行かなければきつと、一生後悔する。

半ば困惑した顔で、それでも風彪は林昭がついて行くのを許してくれた。

食糧が届いたのを見届けてから山を下りた。

帰って来ることはないだろう。同じ雲は二度と戻って来ない。

第1話：下山（後書き）

倉稟^{そうりん}実^みちて則^{すなわ}ち礼節を知り、衣食足りて則ち榮辱を知る…出典『管子』

衣食足りて礼節を知る、のもと。

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。
（月1回）

第2話：出立

師匠を亡くしてから、次に棒を人に向けた時は村を離れる時だと決めていた。それから三年、師匠の喪があけるまでその必要はなかった。この時期に村を出て行くことになったのは天命というものなのか。

森に棒を振る音が響き渡る。林昭を連れて行くことにはしたが、物見遊山に行くわけではない。山を降りるまでに少しでも鍛えておきたかった。

あまり体は大きくないわりに体力はあった。少々のことでは倒れないだけの気力もあった。風彪^{ふうひょう}にはそれが林昭にもともと備わっていたものなのか、流賊になってから身についたもののかは分からなかったが、とにかくその点ではついていて。何かを守りながら戦うことほど難しいものはない。

武術について心得は無く、それまで我流で槍を振り回していたようだった。基礎から鍛えなくてはならないので、少々時間がかかるかもしれない。

風彪は教えられることはあっても教えることはなかった。最初は戸惑ったが、この五日間で教える側も教えられる側も随分、様になった。

朝、食事の前に二刻（一時間）ほど棒を振らせ続ける。一つ一つのみず型を体に覚えさせるのだ。誤った動作があるとすぐ棒を飛ばす。矯正のためだが、相手の棒をかわす訓練でもある。

驚いたことに林昭は始めこそまともに打たれたものの、それから風彪が打つてもまともには打たれなくなった。無意識に体が反応して急所を外すのである。誰もが出来ることではない。風彪ですら師匠との訓練の中で長い時間をかけて習得した技だ。これもまた流賊の中で生きてきたために身についたものなのかもしれない。

「林昭、飯だ」

荷物の中から蒸餅（味をつけた小麦粉を発酵させ、蒸したもの）を取り出す。村を出る時に持ち出した食べ物はいくらだ。他に風彪が持っているのは二本の棒と鄭範^{ていはん}が置いていった路銀、それに弓矢一揃い。山を降りてから装備を整えなくてはならない。

「はい、師匠」

林昭は風彪のことを師匠と呼ぶ。一度はふさわしくないと断つたが、いつこうにやめようとせず、結局そのままになっている。林昭が流賊の中で過ごしてきたにもかかわらず、これほど真つ直ぐな性格をしているのが風彪には不思議でなかった。だが、誰にでも人には知られたくない過去がある。無理に詮索しようとは思わなかった。何より林昭の目がそれを拒んでいるようにみえた。それに、自分にも明かせない過去がある。

無言のまま食べ終わると弓矢を取り出した。林昭が目を見張るのが分かった。

「師匠、それは？」

驚いて当然だ。この弓は山奥の武芸者が持っているような代物ではない。見事なつくりだ。漆塗りの弓身に花が舞い、その中を燕^{ひえん}が飛んでいる。「飛燕^{ひえん}」だ」

並の男なら三人がかりでなくては弦も張れない強弓でもある。何よりこれは自分にとっては過去との唯一の絆である。

師匠が死んでから三年間、飛燕を引かずに過ごしてきた。師匠の喪に服す間は弓を引くまいと決めていたからだ。だがこれからはそんなことは言っていられない。本当に必要になるまでに少しでも感覚を戻しておきたかった。それに、知人への土産が欲しかった。

弓を左手に、矢を右手に持って耳を澄ます。あたりはまだ薄暗い。隣にいる林昭の息遣いだけが聞こえる。緊張が伝わって来る。狩りをするときはあちこち動きまわるときもあれば、一ヶ所で待ち続けることもある。今日は何故か動かない方がいいような気がした。

どれほど時間が経ったのだろう。背後にかすかな気配を感じた。

振り返る。鹿だ。目があった。見つめ合う。お前に俺が射てるか。その目はそう言っていた。射つ、射ってみせる。矢をつがえて引き絞る。

そのとき、世界は自分と相手だけのものになる。指先に、そしてその先に感覚を集中させる。何かが弾けた。次の瞬間、矢は風彪の手を離れ、乾いた風の音を残して鹿の眉間に突き立った。

飛燕も自分も鈍ってははいない。ふと空を仰ぎ見ると、陽は中天にさしかかっていた。

「急ぐぞ、日が落ちるまでに安陽に入りたい」

森を抜けて安陽に着く頃にはもう暗くなりはじめていた。

安陽は大陸の都市の中でも古い方に属しており、大陸暦二世紀あたりから史書に顔を見せる。

東西に長い菱形のような形をした大陸には、ちょうど中央に巨大な山脈が南北に走っている。これは大陸東部で衝嶺と、西部ではミデイス山脈と呼ばれる。この山脈により長い間東と西とはほとんど交流を持たず、それぞれ独自の文化を築き上げてきた。

加えて寒冷な気候のため、文明が発達しても人の行き来はほとんどなかった。それが千年ほど前から緩み始め、山を越える旅人の数がだんだん増えてきた。

山脈の南部を水源として東へ流れる安水のほとりに安陽はある。山脈の東側の旅人たちの中継地として発展した。そして人の行き来が盛んになると同時に物流も活発化し、また安陽は山脈だけでなく海に近かったこともあって東西交易の中心地となった。

更に、安陽は交易都市としてだけでなく、木材や鉄の産地としても知られる。周りを山に囲まれた安陽では古くから木材の生産を行い、安水を使って下流に運ぶことで栄えてきた。加えて上質な鉄を産する鉞脈が上流で見つかったからは多くの鍛冶職人が集まる名工の町としても有名になった。彼らは自らの腕に絶対的な自信を持っており、たとえ相手が誰であろうと信念を曲げない硬骨漢でもある。

それを示す逸話がある。

第三帝国が大陸の西部を統一し、帝号を用いるようになるよりも遙か昔、帝国暦で紀元前一千年から八百年頃、つまり今から千四百年ほど前から千二百年ほど前まで、大陸の東側は禮れいという王国が治めていた。大陸で最も古い王国であり、第一王国とも呼ばれる。その国王がある時、全国の名工に王にふさわしい宝剣を作るよう命じた。

その頃、王の庶兄、公子井が王位を継げなかったことを不服として、同調する公子（王の直接の子だけでなく王の弟や庶兄など王族を広く指して公子という）や卿、大夫と共に反旗を翻し、禮は建国以来最大の危機に陥っていた。この反乱は公子井に従った公子が四人いたことから公子井と合わせて「五公の乱」と呼ばれる。

王は自ら兄を断罪するつもりで、そのための剣を求めたのだといわれる。

事情はどうあれ、その中で選ばれたならば大陸一の鍛冶職人として名を揚げられるとあって、誰もが持てる技術の全てを注ぎこんで剣を打った。

ところが名工として知られていた安陽の王隆という職人は、王の命を受けて素人目に見てもとても名剣とは言えないなまくらを献上した。

王は激怒し、王隆を捕らえて処刑しようとした。刑場へと曳かれる前、刑吏が言い残すことはないかと問うと王隆は落ち着き払ってこう言ったという。

「王は自らにふさわしい剣を、とおっしゃった。だから私は王にふさわしい剣を献上したのだ。それなのに王は私を刑に処そうとなさる。やはり、王はあの剣にふさわしい」

刑吏の報告を受けた王は一旦刑の執行を遅らせて自らその訳を問い正した。すると王隆はこう答えた。

「真の王が天下を治めるのに武器は不要である。何故ならそのよ

うな王は徳をもって世を照らすからである。今、王は自らの武によつて従わぬ者を討とうとなさっている。それでは真の王とは言えない。武は人を遠ざけることこそあれ、近づけることなどない。それも分からぬ王に我が剣は似合わぬと思ったまで」

そこで王は言った。

「しかし今、反逆者が天下を脅かしている。武を用いずして鎮めることが出来ようか」

王隆は考えた。いかに賢人ぶって見せても所詮は鍛冶屋の親父、この言葉もとつさに浮かんだ言葉ではない。（鍛冶屋の）王家に代々伝わる家訓のようなものである。だが、ここまで来て退く訳にはいかない。どうせもともと斬られる身だ、と腹をくくった王隆はこう言ったという。

「それは私が考えることではない」

彼がこの後どうなったかは史書に記述されていない。

しかしこの時期を境に王の政治はがらりと変わる。ともすれば軍事を優先し、民に負担をかけるような政事は大きく変わり、当時賢人として知られていた公孫慶を招いて内政に力を入れ、禮の最盛期を築き上げたのである。

王は死後、皓王（あぐりな）と諡された。彼は今でも名君として人々に慕われている。

安陽に入ると風彪とはある鍛冶屋の前で足を止めた。見ると両隣の両替商や飛脚屋よりも大きな店構えである。屋根は夕陽を受けて鈍く光っている。どうやらまだ新しいようだ。見上げると入り口にかけられている額には一文字「王」と書かれてあった。

中から出て来る者がある。人のよさそうなるっこい顔をしている。番頭だろうか。

「これは風彪様、お久しぶりでございます。今日はどういった御用で？」

「おう、穆累^{ほくらい}。変わりないか？」

「ええ、おかげさまで繁盛しておりますよ。」

穆累が顔をほころばす。

「そうか。戦だからな」

「そういう言い方はよして下さいよ」

今度は急に膨れっ面になる。

「冗談だ。親父はいるか？」

「今ちようど工房から戻ってきたところですよ」

「そうか。では上がらせてもらおうか。悪いが鹿を運んでおいてくれ」

「はい、かしこまりました」

風彪はまるで自分の家にいるようにずんずん奥へ行ってしまう。

林昭も慌てて後を追う。

奥まった部屋で「親父」と対面する。

「久しぶりじゃな。去年の秋以来か」

「まだ耄碌^{もうろく}してはおらんようだな」

親父の顔がほころぶ。よく見るとその熊のような顔には、過ぎ去った年月の跡がすっかり刻まれていた。

「当たり前じゃ。そんなことではご先祖様に申し訳が立たん。お前こそ何をしに来た？まさか年寄りをからかうために、わざわざ下りて来たわけでもあるまい。また農具の修繕か？」

風彪は少し躊躇い、そして親父を真っ直ぐ見つめて言った。

「親父、いや王圭殿^{おうけい}。私のために剣を打っては下さるまいか」

空間を沈黙が支配した。それは一刻（三十分）にも二刻にも感じられた。長い静寂の後、先に口を開いたのは親父、王圭の方だった。

「遂に、行くか」

「はい」

「ならばお前を止められるものはない。明日の朝、旅立つその時に剣を授けよう」

それを聞いて風彪が怪訝^{けげん}そうな顔をした。そんな風彪を見て王圭

が笑う。

「実を言つとな、お前の師匠が死んだと聞いた時から準備はしてあつた。それを鄭範が十日程前に来て仕上げておけと言つたからな、もう出来上がつておる」

「そうでしたか。いや、かたじけない」

風彪が深々と頭を下げる。林昭も頭を下げた。

一瞬、間をおいて王圭が尋ねた。

「ところで風彪、隣におるのは誰じゃ？」

風彪が反応するよりも早く口を開く。

「風彪様の弟子、林昭でございます」

「弟子？風彪は弟子など取らんと思つておつたが？」

「押し掛け弟子だ」

風彪はそう言つて苦笑しながら林昭が旅の道連れになつた経緯を説明した。

「そうか。いい目をしておる。この世間知らずをよろしく頼むぞ」

「親父」

風彪の抗議の声と王圭の笑い声が重なり合う。林昭もこの親父が好きになつた。ふと目を移すと燭台にはいつの間にか明かりが灯つている。振り返ると陽はすっかり沈んでいた。

その後は風彪が仕留めた鹿を肴に宴となつた。席に連なっているのは風彪、林昭、王圭の三人だが、席はあと二人分ある。外からも声がするところを見ると、宴はここだけではないのだろう。穆累がいないので彼が指揮を執っているのかもしれない。

「一人は仕事で遅くなると連絡があつた。もう一人はこの町にいるかも分かんが、念のためじゃ。先に始めることにしようぞ」

その言葉を合図に三人は料理に箸をつけた。

「風彪、行くと云つたがどこへ行く？」

「まだ何も決めていない。しばらくは各地を見てまわるつもりだが」

「ふむ。最近は戦続きで国境の警備も厳しい。‘武芸者とその弟子’では通れぬやも知れんぞ」

「その時はその時だ」

「相変わらず世間知らずもいいところだな」

聞き覚えのある声だ。声のした方を見やると、いつの間にか暗闇の中に人影が現れていた。

「鄭範、穆累は知っておるのじゃろうな」

「ああ」

鄭範は適当に返事を返すと席についた

「うまい。風彪、お前獵師になったらどうだ」

「どういうことだ」

「言ったままの意味だ。お前が獲って来た獣はみんなうまい。高く売れるぞ」

「鄭範」

「お前何もしないで昌を出られると思っているのか？」

風彪は黙りこむ。

「今、帝国は昌に対してかなり締め付けを強くしている。昌から来たというだけで監視の対象になる。この間も靈丘で大きな戦があったところだしな」

靈丘は安陽から見て北東にある都市で、昌の重要な拠点の一つである。帝国との戦争の最前線であり、その先はもう帝国領だ。

昌が帝国と直接国境を接しているのは北側のみ。東と南は共に海で西は帝国自治領と接している。山脈の北側は距離はあるものの、比較的なだらかで越えやすい。そのため西部の統一に一応の完成をみた帝国は北から東部へ進出した。

逆らう国は滅ぼし、従う国は自治領として領土を縮小させた上で存続を認める。それが先帝の治世にはじまる帝国の手法である。

そうして帝国は小国が乱立していた大陸北東部を約二十年で統一した。残るは昌一国。

その昌と境を接している自治領は一つだけではない、がしかしここではそのうちの一国、オストマルクについてのみ触れておく。そもそも帝国自治領は完全な帝国の支配下にあるというわけではなく、せいぜい帝国には逆らわない、程度のものでしかない。ただし、軍事的な権限は一切ない。行政権の方は帝国に納めている税の多少によって決まる。

オストマルクはもとも大陸西南部で強勢を誇った国であり、自治領となつてなお繁栄し大幅な自治権を持っている。山脈のすぐ西にあり、当然東側との関係も深く、またそもそも繁栄の基は東部との交易であるため昌に対してあまり締め付けを行っていない。

帝国も自ら自治権を認めた手前、今のところそれを容認している。更に言えばオストマルクが納める莫大な税無しに対昌戦争を続けていけないためでもある。

風彪は下を向いて黙ったままだ。鄭範に尋ねてみる。

「昌から直接帝国へは行けないということですか？」

「そういうことだ」

「回り道はありませんか？」

「もちろんある」

風彪が顔を上げる。

「カフカス家に護衛を紹介してやった。トラキアとラルフという名だ。明日の朝、来ることになっている。オストマルクへ行く荷の護衛だ」

カフカス家といえはかなり名のある大商家である。

「それで、俺たちはどうしろと」

鄭範や王圭が世間知らずだという理由がよく分かった気がした。

風彪は疑うことを知らない。

「私がラルフ、風彪様がトラキアということでもいいですか？」

「話が分かるな。名前はどちらでも構わん」

「ちよつと待て」

風彪にはまだ話が見えていないようだ。

「鄭範は偽名を使えと言っておるのじゃよ」

帝国は山脈の西で起こり、今でもその中心は西側にある。

山脈の両側に住む人間に、特に山脈のすぐ近くに住む人間に外見的特徴の違いはほとんどない。もともと同じ人種であり、東西交流が盛んになってからは混血が進んだためである。

そんな状態で出身地の決め手になるものの一つは名前である。

今でこそ東で発達した表意文字と表音文字を組み合わせた大陸共通語があるものの、以前は東西で違う言語を用いていた。その名残が名前に残っているのである。

東側では‘風彪’のように名前は漢字で表記される。先の字が姓で、もう一方が名を表す。古い伝統を持つ貴族の中にはそうした本名の他に字あやなを持つものもある。

西側では‘カルマ」「カフカス’のように仮名で表記される。こちららは前が名を表し、後ろが姓を表す。本来は千年以上前、古代西部で用いられた表音文字を用いて表記するものだったが今ではほとんど使われない。

このように東西での名前の違いは明らかである。

「そういうことだ」

そう言って鄭範は必要ないだろうがと言いつつトラキアとラルフを綴ってみせた。

「トラキアは‘T r a c h i a’、ラルフは‘R a l p h’だ」

「分かった」

「林昭、お前は頼りになる。風彪から目を離すなよ」

「はい」

「お前ら……」

その後は他愛ない世間話が続いた。そこへ穆累が来客を知らせてきた。

「カフカス様が見えております」

「おお、ちょうどよい。お通ししてくれ」

「ちよつと待て、俺や親父はともかく風彪と林昭はその格好じゃまずいだろっ」

確かに自分と風彪は村を出てからずっと檻こ籠一枚。

「構わん。わしの家じゃ。わしがよいと言えばそれでよい」

林昭はそこではじめて王圭があの子孫だと知らされた。いくらカフカス家でも鍛冶屋の王家に逆らうと安陽で商売することは出来ないのだとか。

では、と一言残して穆累が下がる。ほどなくして最後の来客がやって来た。

「王圭殿、お久しぶりです」

隙のなさそうな目をしている。着ているものは商家の人間にしては華美を抑えた質素なものだ。

「おや、シバス殿も一緒に来たか。こちらのお二人は？」

そう言いながらこちらに視線を向けてくる。その青い目には多少侮蔑の色が混じっているようにも見えた。

「トラキアとラルフじゃ」

「というシバス殿が護衛にというのは」

「この二人じゃ。腕は保障する」

「そうですか、王圭殿がそうおっしゃるなら」

と言つてカルマはこちらへ向き直つて一礼した。

「何か技を見せて下さいませんか？」

その顔はまだ納得していなかった。

最初は風彪たちの身なりを見て疑っていたカルマも風彪の弓を見て護衛として雇うことを決めた。

「風彪、しばらくはトラキアだぞ」

「分かっている」

囲炉裏の炎が風彪の顔に影をつくる。目は虚空を見上げている。

そこに映る炎は気炎なのか、それとも憎悪なのか。

「鄭範、俺はこれからどうすればいい？」

「好きにすればいい。親父の言う通り、誰もお前を止められやしない」

風彪がうつむく。炎がはぜる。その瞳は何も映してはいない。

「その目で世界を見て来い。それから何が出来るか考えればいい」
遠くで鎚を振るう音が響いている。それに混じって時折強い風の

音がする。風彪が立ち上がって出て行った。

後に残った鄭範はそれからまだしばらく火を見つめていた。

第2話：出立（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。
（月1回）

第3話：赤髪鬼

翌朝、屋敷の門を出掛かったところで王圭が包みを抱えて風彪と林昭を呼び止めた。振り向いた二人の前で王圭が芝居掛った動作で包みを開くと、中に入っていたのは鞘に収まった二振りの剣。

「風彪、この剣を、かざなり風鳴の剣’をお前に授ける」

そう言つて王圭は剣を差し出した。

「かたじけない」

深く頭を下げる。

剣を鞘から引き抜く。その刃には‘風鳴’と刻されてあつた。一振りすると風を切るような音が周りに響き渡る。手にもよく馴染む。風彪は剣を収めるとまた王圭に深々と頭を下げた。

その後王圭はもう一本の剣を林昭に渡して言つた。

「なにぶん急なことだな、名剣というわけにはいかなかったが、それでもそこらのなまくらよりはましじゃ。持つて行くがよい」

「ありがとうございます」

「うむ、ではまたな」

そう言つて屋敷に入ってしまった。

「行くぞ、林昭」

「はい」

もうこれで丸一日、駆け通しである。森の中を木々を縫うように走る。時折枝や下草に打たれながら、鄭範ていはんは駆け続けた。春とは言え、山中の風はまだまだ冷たい。それが熱った体に心地よく感じられた。

北へ向かっている。昌と帝国の国境警備は厳しいが、山脈を北上すれば見つかることはまずない。しかし、気が急ぐせいかすでに二回も馬を潰しかけている。その度に馬を下りて一刻（三十分）ほど

馬を引いて走る。そうすれば馬もまた走れるようになるのだ。

山腹に小屋を見つけた。中に入って火を起こし、饅頭を一つ二つ口にして八刻（四時間）ほど眠る。

小屋はもともと猟師が使っていたのか、中に又が何本か立掛けてある。中央には囲炉裏があり、その他には何も無い。藁で葺かれた屋根の間からは空が見える。

目を醒ますと外へ出て口笛を吹く。辺りは少し薄暗い。日が落ちるまでもういくらもない。夜の間に国境を越えてしまえばいい。

馬が駆けよってくる。飛び乗るとまた駆け出した。

馬蹄の響きだけが聞こえる。木と木の間からは時々星が見える。ふと自分はどうしてこんなに急いでいるのだろうと思った。

風彪が山を下りた。その知らせは余人に任せず、自分で知らせるべきだと思った。しかし、それが言い訳だということも分かっている。鄭範はただ嬉しかった。やっと主が戻って来るのだから。

ただ、それだけでもない。

風彪を、あの村から追い出したのは自分だ。食いつめた流賊に手頃な村がある、とけしかけた。主が立つなら多少犠牲が出て構わない。結局死んだのは賊だけだったが、場合によっては村人が殺されることもありえた。影の仕事をしているとそういうことはいくらでも起こる。時には味方をも切り捨てなくてはならない。

運だ。最後は。ぎりぎりのところで闘っていればそうなる。風家軍が消されてすぐはもつとひどかった。となりで一緒に走っている人間が敵か味方かも分からない。そんなときに鄭範はこの世界に入ったのだ。厳しさは骨の髄までしみている。今さら言うことでもない。

ただ、風彪がそれに手をそめてはならない。裏では常に卑劣な騙しあいや殺しあいがあっても、頭領はそれに関わってはならない。汚れるのは自分たちだけでいい。そのための影なのだから。

彼の気にかかっている問題はそれだけではない。もっと実際的なことも考えなくてはならない。風彪の偽名のことだ。

山脈の反対側に親戚を持つ者も少なくない。帝国の中心部でならともかく、オストマルクで動きが制限されることはなかっただろう。風俗や習慣も微妙に違うことがあり、おそらく風彪にそれを隠すような器用さは無い。むしろ偽名だと気づかれてしまう危険もある。用心深いことは偵諜の必要条件だが、過ぎたるはなお及ばざるが如し、である。

結局のところ、ようやく帰って来た主の障害を少しでも除いておきたかったということなのか。感情が目を曇らせたか。主がいなくなつて十五年、もはや誰も‘風’という姓をかの武者達と結びつけたりはしないのに。

暗くなるにつれて樹間を走るのが難しくなってきた。今や辺りは完全に闇に沈んでいる。しっかり前を見ていないとあらぬ方へ行きかねない。鄭範は夜空を見上げて方角を確かめると手綱を握り直し、馬腹を蹴った。

カフカス家の護衛は私兵のようなものだった。風彪は日払いの傭兵みたいなものだと思っていたが実際は随分違っていた。

何人かは自分や林昭と同じような、いかにも傭兵といった感じが、ほとんどは同じ紫色の制服を着ている。

彼らはみすばらしい旅の武者者が自分たちの一行に加わるのを快く思っていないかった。その考えは主人から伝染したのものにも見えた。安陽を出てからずっと風彪はそのことを感じさせられていた。

林昭はカルマは王圭の顔を立てるために自分たちを雇っているに過ぎない、あるいは雇っている格好をしているに過ぎないと言った。おそらくその通りなのだろう。もう一つの理由は風彪や林昭は旅人だと名乗っているのに全くその話をしないことだった。

風彪はこの二十年を例の山中で過ごしていたため、旅の話など出ない。生まれた土地からそこへ行くまでは長い道のりだったに違いないが、風彪はその時それを覚えているには幼過ぎた。一方の林

昭は多少旅の記憶を持つてはいるものの、武術が未熟であるため弟子になってから日が浅いということになっており、師よりも弟子の方が旅の経験が豊かだと不自然なので、それについては一切話さなかった。

安陽を出て二日目までは安水沿いの街道を進んだ。街道と言っても草が他の場所より少ないところが帯状に続いているというだけである。ただ人の行き来は多かった。帝国との戦で北から昌に入れないためだろう。風彪たちは何度も隊商とすれ違った。聞けば山道には山賊が出るのでとても一人や二人では越えられないのだという。

風彪と林昭は荷駄の後ろを歩いている。

しかし内心風彪はカルマに毒突かずにはいらなかった。護衛は一見屈強そうに見えるが、記憶の中で幼い彼を囲んでいる武者達に比べると激しく見劣りする。彼らに山賊どもの襲撃が防ぎ切れるとは到底考えられない。カルマはもつと自分のことを評価して然るべきだ。このように後ろについて歩いているだけでは何も出来ない。

結局二日目も何事もなく終わった。一行は予定通り山道の入り口にある町、稜に辿り着いた。

町の中を安水が流れている。カルマはそこに架かる橋の袂にある宿に今夜は泊まると告げた。風彪と林昭は部屋が空いていないからと、馬小屋で寝ると護衛の一人が伝えに来た。

仕方なく小屋に入ると中は荷を牽く馬やカルマたちの乗馬で横になる場所もない。結局風彪と林昭は小屋の隣で野宿ということになった。

「親父に言ったら何と言っかな」

「カルマ殿は無駄が嫌いなんですよ」

「俺は親父の推薦も、鄭範の、つまりはシバスの推薦も受けている。シバスが何者かは知らんが王圭が推した人間を無駄扱いするの
か？」

「なら、何事も自分の目で確かめて見ないと気が済まないの
でしょう。商人にはそういう人が多いですから」

「たいした目だな」

風彪は実力相応に扱われないことが氣にくわなかった。控え目に見てもこの待遇は公平ではない。

「林昭、棒をとれ」

集中してしていればカルマのこともしばらくは忘れていられそう
だ。そう思つて林昭に稽古をつけることにする。

日はもう暮れかかっている。安水が、稜の町が夕陽の紅に染ま
っている。山の夕陽ばかりを見てきた風彪にとっては新鮮な美しさだ
った。

安陽を出てからは棒だけでなく剣も振るようになった。剣は棒よ
り重い上、片手で扱わなくてはならない。ようやく棒が手に馴染ん
できた林昭にとっては、容易いものではない。

一通り素振りが終わると風彪と立ち合う。林昭が受けられるのは
一刻（三十分）で一回あるかないかである。どれだけ林昭が目を凝
らして風彪の棒を見ようとしても、見えたと思った次の瞬間には消
え、打たれている。弟子になってたつた二週間で受けられるように
なるはずないと分かつていても、林昭は情けなかった。

「今日はここまでだ」

その声を聞くと林昭はその場に倒れ込んでしまった。全身痣だら
けである。笑いながら風彪が立たせてくれる。

「飯にしよう」

あたりはもう完全に夜だ。宿の明かりがひどく遠くに感じられた。
そう言えば誰も風彪と林昭に食事の時間を告げてくれなかった。

「カルマは飯代も出さぬらしい」

そう言う風彪の顔が険しい。

「稽古している私たちを見て遠慮したのかもしれませんが」

とは言つてみたものの林昭も不安を抱かずにはおれなかった。

宿の食堂に入ると他の護衛たちはもう食事の後なのか、二十人ほ
どが軽く入れそうな食堂には人影が一つあるのみであった。

人影が動いた。こちらへ顔を向ける。

「トラキア殿」

「カルマ殿」

一人で座っていたのは他でもないカルマその人であった。

風彪も少し面食らっている。

「申し訳ない」

カルマが謝った。林昭はその真意が測れずどう反応してよいか分からない。風彪も険しい顔をしている。やはり彼の態度が解せないようだ。二人の表情を見てカルマが言葉を継ぐ。

「王圭殿やシバス殿が推して下さったトラキア殿とラルフ殿をこのように粗略に扱わねばならなかったのには訳があるのです」

カルマの話によるとこの荷についている護衛のほとんどはオストマルク兵なのだという。

「カフカス家が雇っている護衛は十五人ほどです。それすらも渋られました」

それで林昭は合点がいった。臨時の傭兵だと思っていた者たちは、正真正銘カフカス家の護衛だったのだ。

「それほど重要な荷ですか」

「ええ、まあ……」

カルマは言葉を濁した。

「荷の中身は聞くまい。ただ後ろからついて行くのでは何かあっても動きが取れん。もう少し前を歩かせてもらいたい」

「弓が得物とお見受けしたので後ろの方がよいかと思いましたが」

「なに、気遣いは無用」

「では私の前を歩いて頂けますか」

「分かった」

用件が済むとカルマは宿の主人に食事を頼むと席を立った。

「カルマ殿が言ったことは本当だと思いますか？」

「半分は本当だろう。だがまだ信用されてはしないな。それで自ら見張ることにしたのだろう」

思ったより風彪は真相を見抜いている。林昭の考えもほぼ同じだ。すぐ前なら盾にもなり、不穏な動きを見せればすぐ斬れる位置でもある。

ただ、別の見方もある。王圭や鄭範が推したために後ろに回したとすればどうか。前にいけば働き所はだけでなく、オストマルク兵と接触する機会も増える。

山奥出身の武者者、というだけでは説明出来ない気位の高さを持つている風彪のことである。おそらく貴族の子弟だというだけで兵になっているような連中と接するのは我慢ならぬだろう。

どちらにせよカルマの意図が読めないうちは隙を見せないことが肝心だ。風彪がそのつもりなら問題ない。

食事を終えて外へ出ようとすると後ろから肩を掴まれた。

「ラルフだったな。外で寝ることはねえぞ」

背はさほど高くないが肩幅がある。顔には額や頬にいくつか斬られた跡が残っている。壮年といったところか。風彪よりもいくらか年上に見える。風彪が先に口を開いた。

「お前は？」

「レルガだ。カフカス家の護衛を任されている。赤髪鬼なんて呼ぶ奴もいるな」

「ほう、お前が赤髪鬼か」

なるほど、髪が明かりを受けて赤く光っている。

「俺の部屋の寝床は二つ余ってる。ちよいと狭いがな」

「悪いな」

「なに、カルマの奴、最初からそのつもりだったみてえだしな。それにお前、さっきのを見るとなかなか出来るじゃねえか。久しぶりにいい話し相手ができるってもんよ」

どうやらさっきの稽古をどこかで見ていたらしい。あれを見られていたと思うと林昭は恥ずかしくなった。

風彪と荷物を取って来てレルガの部屋に入れてもらった。稽古をしている間は気付かなかったが、外はかなり冷えていた。野宿せずに済むのは有難い。

「それで、お前らはどうやってあの堅物に取り入った」

風彪は危うく本名を明かしそうになりながらも王圭とシバス、つまり鄭範に推薦されたと説明した。

「取り入ったとは心外だな」

「でもなトラキアさん」

「トラキアでいい」

「じゃトラキア、いいか。あいつは絶対に危ねえ橋は渡らねえ。

先方からも護衛が出るような大切な荷に初めて雇った奴を使うってのは考えられんのよ。お前何者だ？」

「見ての通り、ただの武者者だ」

「ふーん、そうかい。じゃ、まそいうことにしといてやろう」

それから二人は武術の話始めた。

「俺の相棒はあいつさ」

そう言っただレルガが壁に立掛けてある大刀を指差した。大刀と

は人の身長よりも多少長い柄に湾曲した刃が取り付けられたものだ。三日月のような刃の形から偃月刀とも呼ばれる。

「お前の得物は何だ？」

風彪は自分の棒を示して見せた。

「じゃあその剣は何だ？」

「何かあった時のためだ。棒が折れて丸腰というわけにはいかんだろう」

「へえ、そうかい」

レルガは納得しきれない様子だ。何となく得物の話はそれで切れてしまった。

その後二人の話題は古今の英雄論に移った。古の名君、皓王（こうおう）や無敗と言われた嬴洪（えいこう）など、中には林昭が知っているものもあった。

眠い。まぶたが重い。風彪が余計なことを喋らないようにしなけ

ればならないのに。

それがこの夜、林昭の最後の意識になった。

目を覚ますと風彪とレルガがいない。風彪の棒もない。

さては置いて行かれてしまったかと、慌てて宿を飛び出すと川原の方に何やら人だかりが出来ている。のぞいてみればその中心にいるのは風彪ではないか。倒れている護衛も何人かいる。みんな同じ紫色に染められた鎧をつけている。オストマルク兵だと気付いた林昭は焦った。殺してしまったのだろうか。風彪に駆け寄ろうとするとまた肩を掴まれた。

「ちよいと待ちな」

いつの間にかレルガが左に立っている。

「師匠だろ。信用したらどうだ。それにあいつらは伸びちまつてるだけだ。骨の一本も折っちゃいねえぜ」

林昭の心配を見て取ったのかレルガが言い添える。もう一度兵に目をやると仲間に助け起こされて息を吹き返している。

「たいした野郎だ。十人でかかってもかすり傷一つつかねえ。師匠があれならお前もかなり出来るだろう」

「いえ、私は…」

まだ入門して二週間だと言おうとしたが、レルガの笑い声にかき消されて耳には入らなかった。

「謙遜するんじゃねえ」
けんそん

そう言っただけを叩くと前へ出て行ってしまった。自分も風彪と立ち合う気らしい。

「トラキア、そんな雑魚の相手なんぞやめて、俺とやらねえか」
隣の護衛から棒を奪うと風彪の方へ向ける。

「やめろ。お前にまで怪我をさせるつもりはない」

風彪は知ってか知らずか挑発的な言葉を発する。林昭はまだ風彪の実力を測りかねている部分もあった。これまでの二回は多数を相

手にして勝っているとは言え、まだ一騎打ちを見たことがない。これまでにかなり場数を踏んでいると見えるレルガに対してどう戦うのか。

「言ってくれるじゃねえか」

レルガが踏み出す。風彪に向かって棒を構えた。風彪は構えるでもなく棒を持ってレルガの方を向いている。

レルガがじりじりと距離を詰めていく。後一步か二歩で棒が届くというところでレルガは止まった。風彪は相変わらず立っているだけだ。しかしレルガの顔には汗が浮いている。

突然レルガが崩れ落ちた。倒れて大の字になる。

「強えな、お前」

呟く息が荒い。少し離れていても胸板が上下しているのが分かる。

「やっぱ、只者じゃねえ」

その顔は負けたのにすがすがしさすら感じさせた。

朝日を受けて汗が光る。よく見ると風彪もわずかに汗ばんでいる。あたりにレルガの笑い声が響き渡った。

第3話：赤髪鬼（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。
（月1回）

第4話：襲撃（前書き）

戦闘シーンがあります。あまり残酷な描写にはなっていないつもりですが、苦手な方はご注意ください。

第4話：襲撃

荷駄は長い列をなして山道を登っていく。稜で更にオストマルク兵が護衛としてついた。彼らだけでも二百人という商人と商品の護送にしては類を見ない大部隊である。

風彪ふうひょうはカルマに従って列の中ほどを歩いている。カルマが雇った護衛たちは皆ここに集まっている。風彪の目から見ると、装備はまちまちだが前後を進むオストマルクの正規兵より精鋭が揃っている。それは、カルマの商人としての成功を示していると言えた。

護衛たちの中でもレルガは頭一つ抜けている。少々荒っぽく映るその所作や言葉遣いにも隙を感じさせない。それでいて柔らかい。必要以上の気負いが無い。

一時、学問に志したことがあるらしく知識は存外豊富だ。だが決してそれに依りかかっているわけではなく、また気さくでさっぱりした気性にくるまれて、知識人によく見られる人を軽く見下すような態度にはならない。どこか相手に安心感を与え、警戒心を解いてしまう。

稜を出て三日目、突如として空がかき曇り、叩きつけるような雨が降り出した。

「ついてねえ」

レルガが馬車から笠を取り出した。

時折あたりに白い閃光が走る。遠くに雷鳴が轟いている。一行は無言で歩み続けていく。

岩肌が左右に迫り、道が狭くなる。地面はぬかるんで歩きにくい。さつきまでは十人ほどが横に並べるだけの幅があったが、今はその半分もない。

もし、自分がこの一団を狙うならこの瞬間を狙うだろうと何気なく思った時、崖の上に稲光の中に浮かぶ影を見た。

「レルガ」

振り向いて後ろを進むレルガに声をかける。

「何だ」

「賊だ。崖の上に潜んでいる」

途端にレルガの穏やかな顔が真剣になる。

「本当か？」

「一瞬だが姿を見た」

「なら間違いねえな」

手で合図すると護衛たちは無言で得物を取り出す。

「ラルフ、飛燕を出してくれ」

弦を張り、矢を受け取る。林昭は緊張して顔が強張っている。

「棒が滑るぞ、手に何か巻いておけ」

そう言いながら袖を裂いて両手に巻き付ける。

まだ何も起こらない。カルマも馬を下りて歩いている。武術の心得が無いなら賢明な選択だ。馬上では身を隠す場所がない。

警戒心から列の真ん中以降の速度が少し落ちた。前方の兵は変わらない速さで進んでいる。前との間隔が開き過ぎではないか、そう思った時、雷鳴とは違う響きを耳にした。

前後に分断された。同時に伏兵が牙を剥く。崖の上から矢の雨を浴びせられる。護衛の兵たちはほとんど落ちて来た岩や木の向こう側だ。こちらに残ったのは五十人にも満たない。

「円陣を組め！下がるぞ！」

レルガはカルマを守りながら後退しようとしている。こうなると下がるしかない。崖の上にいる賊を射落とすことは出来るが、一矢放てば隠れてしまうだろう。

下がるうとして振り返った風彪の目に飛び込んで来たのは、雷光に浮かび上がる人馬の群れだった。百はいるだろうか。

矢嵐は激しさを増す。もうすでに十人近く負傷した。後ろからもゆつくりと敵が迫ってくる。こちらは荷駄があるため素早く下がれない。それがもどかしい。レルガと自分が先頭に立ち、五十人で小さくまとまって走れば百ほどの敵を突破することなど造作もない。

荷馬車が一台横転した。後続の足も止まる。馬車は重い上、ぬかるみに足を取られ、立て直しがきかない。これを好機と見たか後方の賊軍が突撃を始めた。

ここで初めて風彪は弓に矢をつがえた。二本、三本と続け様に放つ。最初の一矢が馬を駆つて踊りかかる頭領の喉を射抜き、続けて放った矢は最前列の兵を貫き通した。

今度はゆっくり引き絞つて、十分の気合いと共に打ち出す。その一矢は一人を貫き、二人目に突き刺さつてようやく止まった。一人目は仰向けに、二人目は前のめりになって泥の中に倒れた。しかし賊徒は怯むこと無くこちらへ迫り来る。

「レルガ、荷はあきらめろ」

周囲の喧騒に負けじと声を張り上げる。敵を突破するなら今しかない。この瞬間にも敵兵はこちらとの距離を詰めている。

「トラキア殿、どうなさるつもりか」

カルマだ。やはり荷を諦めきれないのか、それとも道の向こう側にいる兵をあてにしているのか。

「稜へ引き返す。命があれば荷はまた揃えられる。今ならまだ間に合う。全員で駆ければ」

「しかし……」

とまどっている暇はない。それでもカルマは首を縦には振らない。敵兵は目の前に迫っている。決断を下す前に戦闘が始まった。

乱戦になれば弓は使えない。棒を握りしめる。

一人目、大上段にふりかぶつて叩きつけようとするその戟が落ちて来る前に、懷へ飛び込む。左手一本で突きをくれると、右に風を感じて飛び退く。大振りを外して隙の出来たところへやはり突きにくれた。

山賊にはなかなか動きがいい。訓練された軍としての動きになっている。

一人がレルガの背後を衝こうとしたのを見て駆け寄り、その頭を砕く。振り返り様、伸びてきた槍を払うと小さく横に薙ぐ。

「悪い。助かったぜ」

敵の数はいつこうに減らない。レルガは大刀を縦に使っている。薙げば二、三人一度に斬れるが隙を作る。あまり大きな動作は見せられない。が、その戦い方に風彪は彼の強さを看取った。力押しだけではない攻めもできる。

味方は二手に別れて戦っている。横転した馬車を中心にして防御の陣を張っている者と、乱戦の中に身を置き敵の勢いを削がんとする者。前者の中で林昭が奮闘しているのを見て、風彪は安堵した。あの様子なら自分が倒れるまでにやられはしないだろう。負っている傷も浅いものばかりである。

討つても討つても減らぬ敵に対し、こちらはほぼ半分ほどに削られた。相手は決して無理に押してこようとはしない。あくまで一兵ずつ確実に討とうとしている。しかしこちらをレルガや風彪を中心に奮闘し、そう簡単に崩れる気配はない。うまくいけば分断された兵と合流するまでのぎ切れるかもしれない、と風彪が思い出した時、鼓を乱打する音が戦場に響き渡った。

「な、あれは……」

レルガの視線を追う。その先には黒馬に跨り、漆黒の具足に身を固めた騎馬武者が一騎。構えているのは槍でも大刀でもなく、戦斧。「よりによつて、大斧」のクルーニーだ」

雷鳴と共に、大斧の姿が浮かび上がった。風彪は息を呑んだ。

——まさか。そんなことがあるのか。

その出立ちに見覚えがあった。

棒を手に駆け出す。遠くに聞こえる林昭の、レルガの制止を振りきって敵陣に飛び込む。突然の攻撃にも相手にたじろいだ様子はない。よく訓練されている。やはり、大斧は思った通りの人間なのか。

左から槍が、右から戟が突き出される。ほぼ同時、息の合った動作だ。下手に受ければ後続に刺される。風彪はぬかるんだ大地を力の限り蹴りつけ、跳躍した。二人の頭上を軽々と飛び越える。

予想外の動きに第二段の対応が一瞬遅れる。一呼吸ずれた相手の踏み込みを流して首を打つ。ちらりとあらぬ方へ曲がったその首を視界に収めながら、風彪の足は止まらない。

一度崩れたかに見えた隊列は立ち直っている。また同時に斬りかかってくる。今度はしかし、避けることはしない。小さく薙払って突き出された槍を払うと正面を塞ぐ兵だけを突き倒す。

すでに何箇所か斬られて血が滲んでいる。それでも立ち止まることはしない。

急に道が開いた。

「雇い主を置いて一人だけ逃げようったってそうはいかんわい」
いつの間にか、大斧が馬を下りている。地面にその戦斧を突き立てて、ただ一人突っ込んできた傭兵を待ち受けていた。

「わしとやり合うか、ここにいる手下どもになぶられるか、二つに一つじゃ。選べ」

四方を完全に取り囲まれている。崖の上からも何人かこちらを狙っているようだ。

「いいだろう。しかし、お前に俺が斬れるのか？ローグクーパー」

男の目が驚愕に見開かれた。

「貴様、今何と……」

「俺が勝ったら手下どもは引き揚げるのだろうな」
言いながら棒を泥の中に突き立てる。

「待て」

その声を一顧だにせず、剣を抜いて斬りかかる。首を狙った斬撃は戦斧の柄に弾かれた。勢いに任せて更に突きを繰り出す。相手が切っ先をかわして下がるうとする。間髪いれず今度は真正面から剣を振り下ろす。

またも柄に阻まれたその剣に渾身の力を込める。そうして相手と押し合う形になった。いわゆる鰐迫り合いの状態である。

「俺は風彪だ」

再びクーパーの顔に驚きが走る。

「な、につ……」

「薪を割るのにそんな大きな斧はいるまい、と言ったのがつい昨日のようだ」

微かに顔をほころばせてみせた。クーパーが斧を引いた。

「風彪……様。生きておったのですか」

「父上の無念を晴らすまで死にはせん」

クーパーは戦斧を放り投げて泥中に座りこんだ。周りに泥が撥ねる。相変わらず雨は弱まることを知らない。二人の会話は雨音に遮られて他の者には聞こえない。

「お前こそ、何故山賊などやっている。父上は略奪や殺戮^{さつりく}は一切禁じておったはず。返答次第ではここで斬る」

厳しい表情をして見下ろす。クーパーの顔がはっと上がる。

ローグ「クーパーというのは本名ではない。‘ローグ’とは‘ならず者’といったほどの意味である。彼は粗暴でしばしば軍令や軍律に背いたので、いつの間にかこう呼ばれるようになったのだ。

「それは」

「どうした。申し開きをしてみろ」

クーパーはしばらくうつ向きしていた。やがて顔を上げると、ゆっくりと語り出した……

第4話：襲撃（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。
（月1回）

第5話：過去

かつて、クーパーは‘風家軍’あるいは‘風の騎士団’と呼ばれる集団の一角を担っていた。風家軍は、かつて大陸の東北に存在していた‘隗’^{かい}という国に仕えた軍閥である。独自の領土を持ち、国家に対して納税の義務を持たず、ただ忠誠のみを求められる。その軍は長きに渡り大陸最強の軍と呼ばれ、恐れられた。

クーパーが風家軍の将の一人であった頃、風家軍を指揮した棟梁を風洪という。神速の騎馬隊を率い、また弓を執つては岩をも射抜き、槍を執つては天下に並ぶ者無し、と言われた猛将である。数々の戦で戦功をあげ、それにより従来の領土に加え、嬴^{えい}という土地を与えられた。それ以降は嬴洪^{えいこう}と名乗る。

大陸東部では小国の乱立する、いわゆる乱世が続いた。風家軍はその荒波の中で隗を守り通して来た。‘風’の旗、翻るところ常勝ありと言われ、また歴代の棟梁の中でも嬴洪は特に神将として今でも畏敬されている。

嬴洪は加えて義に篤く、一度約定を交わせば違えることは一切無いとされ、‘百金を得るも嬴洪の一額^{いちがん}を得るに如かず’とまで言われた。大金を手に入れるよりも嬴洪の‘分かつた’^{つなず}という領き一つの方が価値があるというのだ。

風洪が嬴洪と名乗るようになって間もなく、大陸暦一五九二年帝国の東方進出が始まる。北方の雄と言われた累、皓王の頃から続く名家、驂^{さん}などが相次いで滅ぼされていった。

隗は帝国の東方進出の際、一戦も交えずに帝国に降伏してしまう。自治領としての存続を選んだのである。風家軍もそれに従い領土、規模を縮小して帝国軍に組み込まれることとなった。元々嬴を含めて五城程度の領土を有していた風家軍は、これにより本拠地、慧丘^{けいきゅう}一城を領するのみとなり、四軍合わせて五万あった兵力も二師、合計五千と十分の一に減った。

軍、師は共に兵力を表す単位であり、一軍は一万二千五百人、一師は二千五百人である。一軍は五師で構成され、一師は五旅で構成される。なお一旅は五百人である。これが部隊の最少単位ということになる。

また四軍は格の上位のものから中軍、上軍、下軍、佐軍と呼ばれる。それぞれに将と佐将があり、一般にはその八人がその集団における政治的な指導者でもある。ただし風家軍の場合はその限りでなく、内政や外交にたけた者は軍の将や佐将でなくとも政治的発言力を有していた。簡単に言えば能力主義ということであろう。

クーパーは風家軍が縮小される前に佐軍の佐将を務めていた。席次としては軍の中で八番目、主だった指揮官の中では最下位である。その理由はやはり規律に反した行動や短慮であつたが、その真つ直ぐな性格と武勇を嬴洪に愛されていた。

隗が帝国に降伏し、風家軍の兵を奪われ、しかも帝国の下で働かねばならなくなった時、諸将が無言で帝国に従う中、彼は一人だけ声を大にして不満を訴えている。帝国の犬になるくらいなら解散しようと言つた。

クーパーに限らず東方に住む人々の帝国に対する感情は芳しくない。今まで東西は互いに干渉しないという暗黙の了解があつたのに、帝国がそれを一方的に破つたという意識と共に、先祖ではなく一人あるいは一つの神を信仰する西方の思想を受け入れ難いということがその主な理由である。

東方では国の主や功のあつた臣下は宗廟しやうびやうに祀まつられる。つまり神として信仰の対象となる。また、一般庶民の中にも先祖を神として祀る、いわゆる先祖崇拜が浸透している。

一方、西方では神は唯一絶対であつて他にはないとされる。そのため先祖崇拜は認められない。従つて、降伏して自治領となつても祭司は細々と行わざるを得ず、また抵抗して滅ぼされてしまうと宗廟そのものを破壊されてしまう。信仰の対象を否定されて帝国を恨む者も決して少なくない。

クーパーはだから東方の人々の気持ちを代弁したとも言える。結局風家軍を離れることはなかったが、帝国の指揮下に入っても不服を唱え続け、嬴洪もまたそれを黙認していた節がある。誰も当時の状況に心から満足してなどいなかった。

心の内はどうあれ、風家軍は五千になっても勝ち続ける。数の減少によって全軍を騎馬で構成出来るようになり、機動力は格段に増した。斥候を放つてもそれが本陣に報せをもたらす前に急襲をするその様はまさに‘風’であった。

その‘風’の中にあつてひととき精強と言われたのが赤騎兵である。嬴洪が直接指揮を執るいわば親衛隊、兵士の服装、鎧の類から旗に至るまで赤に染め抜かれている。精強といわれる風家軍の中でも特に選りすぐられた軽騎兵である。五百で万余の軍に匹敵するとさえ言われた。

だが、風家軍は強すぎた。帝国上層部はその力が反乱に加担することを恐れるようになっていった。

表向き、帝国の占領政策にさほどのほころびは見えていない。帝国は自治領同士の待遇に差をつけることで、対立を煽り結束を防ぐとしたのである。いわゆる分割統治である。

が、彼らは自分たちの政策に安心してはいなかった。実際に帝国の支配から逃れようとする運動は各地に見られ、小競り合いも起きていた。そこに風家軍が加われれば反乱軍は核を得、多くの都市が帝国に反旗を翻すことは火を見るよりも明らかである。

そして、大陸暦一六〇七年冬、これが風家軍にとって長い冬の始まりとなった。

風家軍は帝国の昌攻略に先鋒として参加、その神速と武勇を如何なく発揮したが、戦況は膠着状態に陥る。帝国軍は風家軍が生んだ好機をことごとく逃し、あるうことかその責任を風家に押し付けた。

風家はその埋め合わせとして、呂湖谷^{りょこく}へ敵を誘い込むという任務を与えられる。風家軍が伴敗してそこに昌軍をおびきだし、前後を遮断して火を放ち、昌軍を壊滅させる作戦である。

呂湖谷は両側を絶壁に囲まれた難所である。谷底はもとも湖であつたが、あるとき湖に水を供給していた泉が涸れ、干上がった。今では赤茶けた地面に草木は生えず無惨な姿を晒している。谷の幅は狭いところから広いところまで様々で一定しない。その地面は半ば黒く染まつている。

風家軍は見事、昌軍の別動隊三万を呂湖谷に引つ張り込んだ。そして――

クーパーは我が眼を疑つた。前方を今しがた崖の上から落ちて来た岩石が塞いでいる。自分たちが通り抜けるまでは落とさないはずだ。何故だ。

その時、障害物に火矢が降り注いだ。本来火などつかぬはずの赤茶けた岩は、瞬く間に紅蓮に染まつた。油がかけられていたのである。

裏切られた。憤怒がクーパーの全身を駆け巡つた。不当な扱いを受けながらなお耐え、帝国のために今まで不本意ながら己が武を振るつて来たその代償がこれか。

遠く本陣から反転を命ずる鼓が聞こえる。この期に及んでも嬴洪はまだ、まだ帝国に忠節を尽そうというのか。呆れた。だが、そんな棟梁だからこそ彼は帝国の下についても風家軍を離れなかった。そうして筋を通そうとする嬴洪がたまらなく好きだった。

結局、自分も嬴洪も変わらない。ただ真つ直ぐに生きようとして来た。どちらも正しいと思う。隗が帝国に服したから帝国に仕えるのも、祖国を‘国’でなくしてしまつた帝国を怨むのも。しかしやはり、こんな日が来るなら死んででも嬴洪に風家軍解散を、あるいは亡命を決意させるべきだった。

とは言え、決定権は棟梁のもの。嬴洪の決めたことには逆らえない、逆らわない。ここで嬴洪と共に死ねるならそれも悪くない。死ぬ方が飼い殺しにされるよりましでもある。そう考えると腹が据わつた。相変わらず心の中は煮えたぎっている。本当なら、風家

軍全軍で帝国相手に暴れ回りたい。岳東から帝国を追いついてしまいたい。

もう自分の春秋は終わったかと思うと、胸の中を索漠とした風が吹いて行くように感じた。もう終わってしまうのか。

クーパーの頭にこれらの思いが去来したのは、ほんの一瞬だった。想いが心を通り過ぎた頃、合図を受けた麾下の軍勢と共に反転していた。次の瞬間、総攻撃を命ずる鼓の乱打に重ねて真紅の閃光が走った。嬴洪の赤騎兵である。クーパーも負けじと雄叫びをあげ、戦斧を振りかざして突っ込んで行く。

クーパーの後ろに続くのは黒騎兵。その様は馬、甲冑に至るまで全て漆黒の闇に染まったかのように。風家の騎馬隊唯一の重装騎兵である。機動力では少々遅れをとるが、ぶつかった際の衝撃は風家軍の中でも赤騎兵と一、二を争う。縦列で敵陣を貫く赤騎兵が紅い稲光なら、横に広がる黒騎兵はまさしく黒き津波。

津波が昌軍をまさに呑み込もうとしたその時、両側の崖から火矢が戦場に降り注いだ。クーパーは、そこで信じられないものを見た。火矢の突き刺さった大地の周りが明るい赤に染まっている。誰もが見たことのある色、炭火の色だ。

赤がどんどん大地を埋めていく。黒く染まっていた地面は、かつて湖の底に沈んでいた石炭だった。細長い谷の両端では地面の黒がやや薄い。自然と両軍は谷の中央から離れようとする。

クーパーも攻撃を指揮しながら少しずつ右へ右へとその位置をずらす。かなり谷の崖に近付いた時、戦の始まりになった音を再び耳にした。岩が落ちて来た。一つ一つの直径は人の背丈ほどもある。逃げ場は、なくなった。中央にいれば焼け死ぬ。端にいれば押し潰される。両軍共、戦どころではない。兵たちは武器を捨てて逃げ惑っている。風家の兵たちも動揺を隠し切れない。

嬴洪はどうなったのか。クーパーは赤備えの集団を探した。一人の部下が声を上げる。前方左手、敵の大將旗の下。確かに敵將を貫く槍が見えた。

突然、馬が棹立ちになった。乗り手が飛んだ。落ちた。もう一度立ち上がる。地面が明るい。剣を抜く。自らの足で駆ける。周りに立っているものは無い。

天から矢がそこに吸い寄せられていく。その影が崩れ落ちた。その音が、なぜかとても大きく響いた。

はつと振り向くと岩が自分めがけて落ちている。喉に、熱いものが込み上げてきた。喝と戦斧を振り上げる。かち割ってやる。そう思った。全て叩き潰してやる。

その後、どうなったか覚えていない。気がつくと、寝台に横たわっていた。家の主がクーパーは玄関に倒れていたのだと告げた。

あれからどうやって落ち延びたと言うのだろう。倒れていたときに掴んでいたのは戦斧のみだったという。馬も無かったらしい。聞けばここから呂湖谷まではかなりの距離があるようで、主人は歩けば二日はかかるかと教えてくれた。

二ヶ月ほどその家で傷を癒していた。その間に帝国では呂湖谷での戦に参加しなかった風家軍の人間も捕らえられ、処刑されたと聞いた。未だに見つからない何人かは帝国が捜しているということだった。その中にはクーパーの名前と共に風彪ふうひょうも挙げられていた。

その家は呂湖谷での戦から二ヶ月の間に昌領から帝国領になっていて、いつ官吏が踏み込んで来るか分からない。幸いにも主人はクーパーの存在を隠し、かばってくれた。

それでもやはり限界があった。屋敷の外は敵だらけである。懸賞金欲しさに密告するものが現れないとも限らない。家の前で倒れていたクーパーを目撃した者も何人かはいようし、戦斧を得物にしている者はそういない。もはや捕まるのは時間の問題であった。

そこで主人は逃亡先としてこの辺りにある山寨を紹介してくれたのである。何でもその頭領は昔冤罪で処刑されそうになったのをかばったとかで親交があるという。

それから今までずっとここで暮らしている。時には食べていくた

めに荷駄を襲つたりもしたが、護衛の兵以外は殺さない。また護衛がつくような大商人だけを獲物にしている。二人、三人で組んで山越えするような行商には、少なくともクーパーが来てからは手を出してはいない。

……本当じゃ。信じてくれい」

風彪は考え込んだ。クーパーの言うことに嘘は無いのだろう。クーパーとしてはどうしようもなかったに違いない。ただ風家軍の一員であつた者が落草していた、ということには耐えられなかった。かつて父から武とは民のために限って使うものだと教えられた。羸洪はそれを生涯守り通した。その腹心が今こうして民に刃を向けている。

だが、自分がいつまでも山に籠こもつておらず、もっと早くに下りていたら。落草を防ぐことは出来なかったにしても、クーパーはこんなに長く惨めな思いをする必要はなかったのではないか。いつの間にか居心地のいいあの場所で、自分に甘えてはいなかったか。

今から思えば口にこそ出さなかったものの、鄭範ていはんにしてもきつと歯がゆい思いをしていたのだろう。それを自分は見ていたのか、見ようとしなかったのではなかったか。

鄭範は山中で暮らしている間、何度となく外の世界を教えてくれようとした。ある時は自ら、ある時は手の者を使つて。もしかしたら、自分はその外の世界が怖かつたのかもしれないとも思う。広い、未知の世界が。

結局、皆が様々な形で苦労している間、自分は修行と称してその苦しみや恐れから逃げていたのだらう。山中で過ごした二十年の少なくとも半分は逃避に過ぎなかったのだ。クーパーを責める資格など風彪にありはしない。

「もういい、クーパー。苦労させたな。済まなかった。もう一度風家に力を貸してくれるか」

クーパーの目に光が灯つた。雫が頬を滴り落ちる。雨はいつの間

にか上がっている。太陽が雲間から金色の輝きを見せている。

「はっ、喜んで……」

もう一度空を見上げると、太陽は流れる雲に隠れてしまっていた。決して明るいとは言えない。どこまでも灰色。しかし、それでもところどころ青空が覗いている。

第5話：過去（後書き）

ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。
（月1回）

第6話：洞察

周りを見渡してみると、雨こそ上がったものの荷駄は横転し、品物があたりに散らばっている。すべての荷車が使えなくなっただけではないものの、戦闘の際に矢や槍などを避けるための壁にされるなどして車軸が折れ、使い物にならなくなってしまったものも数台あった。

もちろんそれだけではない。戦闘の跡が生々しく残っている。折れた剣や矢柄がやや紅色に染まった地面に突き刺さり、時折雲間から顔を見せる太陽に照らされて鈍い光を放つ。人も馬も、敵味方を問わず、死体となって転がっている。首の無いもの、手足の無いもの、中には胴のあたりから真つ二つになっているものまであった。レルガが斬ったのだろうか。鎧ごと体が上下に分かれてしまっていた。

行く手を見やれば道は岩や木やその他の瓦礫がれきで完全にふさがってしまっている。オストマルク兵はまだほとんどが向こう側に取り残されているらしい。襲撃が始まってからだいぶ時間が経っているのに誰も越えてこようとしないのだろうか。そうであれば許し難いことだ。怠慢以外の何ものでもない。もともと当てにするつもりは無かったものの、やはり腹が立った。あの瓦礫を取り除くには戦力云々よりまず人手が必要だ。

そこで思い当たることがあってもう一度周りを見る。もともとこちら側にいたのは五十人ほど。そのうち今生き残っているのは二十人程度。その二十人はほとんどがレルガも含めてカルマの傭兵である。オストマルク兵は大半が討ち取られていた。

林昭はどうなったかと思っただ、いくつか傷を受けただけで済んでいる。ただ足を斬られて自力では動けない状態ではある。命には特に別状は無い。まだ知り合って二週間にもなっていないが、この中で唯一トラキアの本名を知っている人間だ。何もかも話せる相手

がないというのがいかに辛いかを、風彪は師を亡くしてから三年でいやというほど思い知った。戦で人が死ぬのは当たり前だと分かつてはいるが、それでも生きていてほしいという気持ちは常にある。今でも部下を死なせてしまったといつて涙を流す父の姿を覚えている。

クーパーにはとりあえず北へ行ってもらうことにした。かつての本拠地、慧丘けいきゅうのあたりに鄭範が築いた塞がある。しばらくはそこにいてもらうことになる。鄭範は風家の糧道をも管理しているから兵糧の心配もない。かつては五万もの軍を養ってきた糧道である。多少縮小したとはいえ五百ほどを養うのに造作は無いだろう。また彼に苦勞を押し付けてしまふと思うと心苦しくもあつたが、クーパーは二十年待つたのだからこれ以上待つたとしてもたつた一年や二年でどうということはないと言ってくれた。

長い間はなしこんで、クーパーが退いていくのを見るとカルマたちは怪訝そうな顔をした。林昭も問いかけるようなまなざしを送ってくる。あえてそれらを無視し、戦場の後始末を手伝った。おそらくこの人数では前方の障害物を取り除くことはできない。今日はここで休息を取り、応援を待つて山を降りるしかないだろう。もつとも、応援がくるといふ保証はどこにも無いのだが。

襲撃があつたのは昼間で、片付けが済むのは結局完全に日が沈む頃になつてしまった。誰もが疲労困憊ひろうこんはいといったありさまである。カルマも風彪の予想に反して、自らの手で死体の埋葬や荷の積みなおしを手伝った。大商人ともなれば上から命令するだけかと思つていたが、彼にはそれが当てはまらないらしい。風彪は少し彼を見直した。

日が暮れあらかた後始末が終わると、みな疲れきつてすわりこんでしまった。無理もない。風彪とて例外ではない。体が鉛のように重い。情けなくもあつたが、懐かしくもあつた。こんな感覚も久しく忘れていたようだ。

そんな中でまだ立っている者がいる。二人とも方天戟を杖に、気

丈にも見張りを務めようとしている。おそらくこのあたりはクーパ
ーの手で安全が確保されているはずだから、彼らの働きは徒労でし
かないのだが、もちろんそれを言うわけにはいかない。が、その意
志の^{つよ}勁さは並大抵ではない。ちょうどそばへやってきたカルマに彼
らのことを聞いてみた。

「ああ郭方^{かくほう}と呂盛^{りよせい}です」

「昼間は見なかったように思うが」

方天戟を振るう人間は少ない。斧ほどではないが、やはり扱いが
難しい。槍の両側に二の腕か、それより少し小さい円月形の刃が取
りつけられている。突くも斬るも自在だが先がかなり重くなつてし
まい、よほど修練を積まねば振りまわしているつもりで振りまわさ
れてしまう。それで使いたがる者が少ない。一度見れば覚えていな
いということは無いはずである。

「彼らは瓦礫の向こうにいましたからね」

「そうか。その向こうはどうなったのだ？」

カルマは苦笑と言う。

「分断された時点で護衛のほとんどは、蜘蛛^{くも}の子を散らすように
逃げてしまい、残った彼らは遠巻きに監視されていたということだ
す。手際の良さに感心して抵抗する気も起こらなかったといえます
さすがはクーパーといったところか。

「ところでトラキア殿、わたしにも聞きたいことがあります」

となりに腰を下ろしたカルマが、いったん風彪から目をそらして
上を見上げた。つられて夜空を見上げると小さな光の粒がたくさん
散っている。白く、淡いその光に、風彪はしかしどろいうわけかこ
のときばかりは胸のざわつきを感じた。カルマの目が鋭くなる。

「あなたは本当の名前を、明かしていませんね」
驚いた。

「なぜ、そう思う」

カルマが微笑した。

「まず、王圭殿の待遇ですね。彼は身内と動物には甘い人ですが、

他人と仕事には滅法厳しい。あなたはあの夜、あのようなぼろを着てあの場所にいた。あなたが他人なら、王圭殿がそんなことを許すはずがありません」

「それだけでは説明になるまい」

天を見上げながら言葉をかえす。そのまま仰向けに倒れこむ。カルマの顔が見えなくなつた。そうすると星が語りかけてくるような不思議な気分に襲われた。

「ええ」

カルマの首は上を向いていない。座つたまま、真つ直ぐ前を見ている。

「わたしは飛燕を見たことがあります。いつか、父に連れられて羸^{えいこう}洪様にお会いしたことです。もうあれから四半世紀経ちましたが、燕の舞うその美しい姿、一度見たら忘れられるものではありません」

思っていたよりカルマは年を重ねているようだ。父に会って飛燕を見たなら、四十より下ということはあるまい。風彪は自分と同じくらいか少し上だと思っていた。

「あなたも初めて会つた夜、飛燕を見せてくれました」

「なるほど。うかつだったな」

王圭の家で夕食をとにした夜、風彪を雇うのにいい顔をしながらカルマに弓の腕前を披露した。考えなしに飛燕を出したのはまづかつたようだ。

「まだ、ありますが……」

言葉をまとめるためか、一度沈黙する。次にその口から出た言葉は、風彪を驚愕させるに足るものだった。

「もういいでしょう。風彪殿」

ため息をついてカルマが振り向いた。微笑んでいるがその目は笑っていない。風彪が黙っていると、彼もとなりに倒れこんできた。両の手を頭の後ろにまわして、ひざを立てて。同じ格好で空を見上げる。

もう隠しても無駄か。十分に気を配ったつもりだったが、どうもこういうことには向かないらしい。鄭範ならうまく言い抜けられるのかもしれないが、自分はそんなに器用ではない。

「どうするつもりだ」

帝国は今でも風彪の首を探しているだろうか。

「別に」

「別にと言われてもな」

「あなたは何が望みですか」

「その望みはかなうのか」

「わたしにできることであれば」

「そうだな…」

自分は何をするべきなのだろうか。風家軍の再興、その前に何かやらなくてはいけないことがある。一体何だったろう。

「しばらくこのまま護衛の列に加えてもらおうか。帝国を見たい」とにかく今は見聞を広げることだった。この目で世界を知りたい。「構いませんよ。名前はとうしますか？『トラキア』のほうがいいですか」

すぐばれてしまうような偽名など使わぬほうがいいだろう。帝国が、今も自分の首を欲しているなら、それも望むところだ。

「いや、風彪と呼んでくれ。もう一人は林昭だ」

「いいのですか」

「構わんさ。あなたに見抜かれてしまうようでは何の役にもたたらんだろうよ」

カルマが苦笑した。風彪も笑いかける。

「偽名を使っていた理由は適当にでっち上げてくれ。俺はどうも騙しあいには苦手だ」

林昭は岩にもたれて動けなくなっていた。戦っている間は必死で脚を斬られたことも気づかなかったが、ほっとして緊張が緩むと立てなくなってしまったのだ。敵中に消えた風彪も無事に戻ったのを

確認するともうそれ以上動けなくなっていました。気になるのはどうして師匠が敵の首領とあんなに長く話し込んでいたのか、ということだ。どうして風彪はあかも長く話しこんでいたのだろう。林昭は風彪についてほとんど何も知らない。かすかな疑念が頭をよぎった。

林昭を手当てしてくれたのは郭方という男だった。まだ若い。おそらく林昭より少し上、二十五くらいといったところか。衣は赤を基調に染めあげられている。

話を聞けば落ちてきた瓦礫の向こうにいたのだという。道理で見覚えのない顔だと思った。カルマに雇われておよそ二年になるそうだ。もともと水銀売りだったのだが、あるとき乗っていた船が難破し商売道具を失い、生活に困っていたところを武術の腕を見込まれて、取引のあったカルマに護衛として雇われたと言った。

「方天戟で俺に勝てる奴あ、ちよつとこないね」

と、彼が結んだところでその後ろから別の人影が現れた。

「それはどうでしょうか」

彼もまた右手に方天戟を握っている。年齢もほとんど同じくらい。彼の衣は白を基調にしている。口調と相まって、郭方に比べて落ち着いた印象をうける。

「そういうことをいうのはせめてわたしに勝ってからにしてください」

そういいながら彼は林昭の傷に膏藥うづやくをはりつけた。

「これで大丈夫でしょう。深い傷ではないからなおったあとに動きが悪くなることもない」

彼は呂盛と名乗った。やはり瓦礫の向こうにいたので林昭としては初めてみる顔である。腰にいくつか小さな籠をさげている。聞いてみればその中身は種々の薬草であるという。

呂盛の家は代々薬師で、彼も父から薬草など様々な薬に関する知識を授かり、十八の頃からその薬を売って生計をたてていた。あるとき流行り病にかかったカルマに薬を処方して命を救い、それから

カルマの護衛をつとめている。郭方と同じ時期に雇われているが呂盛の方がわずかに遅いようだ。

呂盛は幼いころ、かつて大陸北東部で強勢を誇った累の武将、袁盛^{せい}にあこがれて、十歳になる前から方天戟の扱いを学んでいたという。林昭も名前には聞き覚えがあつたがどんな人物かまでは知らない。

「袁盛は累建国に際し初代累王、韓達^{かんたつ}がまだたつた五百人の傭兵団の長に過ぎなかったところからの部下で、自慢の方天戟とともにいつも累軍の先頭にありました」

そして、彼にまつわる逸話は様々あるがといって呂盛はその一つを話してくれた。

「あるとき、韓達が戦に敗れて城を逐^おわれ、わずかな供回りのみを連れて落ちのびねばならなくなったことがありました。まだ拳兵して間もないころです。供回りのほとんどが諜報や潜入を専門にする者ばかりで、暗闘にはたけていても戦場で武器を振るうのは不得手でした。彼らの助けをかりて韓達は燃え落ちる城を脱出しましたが、落下してきた木材を右足に受け、歩くこともできなくなります。供も逃亡の途中、敵をひきつけるためのおとりとなっていないなくなります。」

そのとき、韓達のそばにいたのが袁盛でした。彼は負傷して動けない主君を背負い、五日間走り続けたといえます。敵方は五千近い兵を動員して韓達を捜させましたが、袁盛はそれと遭遇する度、ことごとく斬り捨て、討ち取った敵兵の数は五百とも一千ともいわれます。

後に韓達が累王としての地位を確立したとき、袁盛がいなければここにすわっているのはわたしではなかった、としみじみ述懐したといえます」

「袁盛はそれにこたえて、わたしはあなたがその場所にふさわしいとおもったから、あときあの場所にいたのです。そうでなければわたしはあなたを放り出して、逃げていたでしょう、といったと

「うがな」

赤い髪、レルガだ。彼は見たところあまり学があるようには見えないのだが、どういうわけかいろいろなことに通じていた。

大刀の腕も本物だった。昼間の戦闘でほとんどがなんらかの傷を負っているのに、彼は一つも傷を受けていない。それに敵味方入り乱れて戦うなかで、全体を見渡して指示をだす余裕もあつた。林昭をかばう動きを見せたのも一度や二度ではない。

そんなレルガを風彪は一合も刃を交えず下したのだ。いったい師匠は何者なのだろうか。

呂盛はレルガに、そういう合理的なところもわたしは好きですよ、といつてから林昭のほうに向きなおり、

「あとはわたしたちにまかせて、休んでいなさい」

というとはかの怪我人を看るために歩いていった。

レルガは林昭の肩を軽くたたいて、

「初陣にしちや上出来だぜ」

といつて歩いていった。郭方も、

「呂盛はあんなこといってやがるが、あいつだって俺に勝ったことねえんだぜ」

とささやいて呂盛のあとを追つていった。

林昭はついに睡魔にあらがうのをやめ、長い一日に幕を下ろした。

戦闘があつた次の朝、レルガは起きてすぐカルマに呼び出された。まわりを見てもまだ起きている者はほとんどない。呼びに来たのはトラキアだった。

「おい、何の用だ」

と聞いてみてもトラキアは、来れば分かる、の一点張りでこたえてくれない。春先とはいえ、山の朝はまだまだ寒い。あたりにはうつすらと霧がかかっている。やはり目を覚ましている者はおらず、聞こえてくるのは二人の足が地面を踏みしめる音だけである。

見張りの姿もない。昨日あれだけ大規模な襲撃を受けたのに、見

張り一つおかれていない。カルマはそんなに不用心な人間ではなかったはずだが、と頭をひねる。レルガはまた昨晚遅くに見張りの段取りを決めようとカルマの幕舎を訪れたときに彼から、見張りの手配は済んでいる、今日はレルガもゆつくり休め、と言われたことを思い出した。あれはいつたいどういうことだったのか。

あれこれ考えているうちにカルマの幕舎にたどりついた。幕舎は全員分あったのだが、一つを除いてみな瓦礫の下に埋もれてしまったのである。唯一残った幕舎をカルマが使っている。

中に入ると待っていたのはカルマだけではなかった。ラルフといったか、トラキアの弟子も火にあたって暖をとっていた。なんとなくレルガはこの集まりがトラキアの正体にかかわることだという気がした。ラルフがここにいることが、何よりその証左である。

「お呼びだそうで」

火が少しくすんだ幕舎の幕に四人の影をつくっている。

「ああ、来たか」

仕草でカルマがすわるよう、うながす。

「これはどういうわけで」

ラルフはとても眠そうな顔をしている。無理もない。致命的ではないにしろ、傷は浅くない。

「風彪殿」

トラキアがうなずいた。ラルフは口を大きくあけて、面食らった顔をしている。レルガには何が何だか分からない。

「師匠」

ラルフが口をはさむ。トラキアがそれを抑えて、

「もういい、林昭。分かってしまったことだ。この際すべて明らかにしてしまった方がいい」といった。

「どういうことだ」

レルガにはまだまったく話が見えてこない。トラキア、いや風彪がレルガの方に向きなあった。

「だまっついていて悪かった。トラキアというのは本名ではない。俺は風彪、こいつは林昭という」

「偽名だったのか」

「そうだ」

それを知らせるために呼び出したのか。しかしそれならばわざわざ四人だけのこの場でいうことはない。みんなが聞いているところで明かしても構わないはず。

「まだ何か隠しているな」

風彪の顔が少しゆるむ。

「その通りだ」

炎がゆれる。入口に目をやると外はまだ薄暗い。この空間だけが別の雰囲気をもっていた。

「レルガも林昭も風家軍は聞いたことがあるだろう」

うなづく。林昭もかすかに首をたてにふった。風彪の顔が引き締まる。少しうつむいたその顔を火が照らしている。風の騎士団を率いた団長の姓は「風」。まさか、

「わたしは、‘風’を継ぐ者、えいこう嬴洪の嫡子、風彪」

そういつて彼はかたわらの弓をとった。

「この‘飛燕’こそ、そのあかし」

そして林昭の方に体を向けると、

「今までだまっついていてすまなかった」

といって頭を下げた。

「おい、うそだろ」

カルマは静かに微笑んでいる。林昭はまだ面食らったままだ。

風家軍は十五年前に呂湖谷ルイコで帝国に嵌められて、嬴洪以下、幹部は全滅したはず。

「俺はあの戦の三年前、修練を積むために父のもとを離れ、山中で暮らしていた」

風彪の目が細くなる。どこか遠くを見つめているようだ。彼の目にはいったい何が映っているのだろうか。

「今から思えば、父はあのときが来るのを予見していたのかも
しれない」

物音をたてるものはない。耳に入るのは風彪の声と、たきぎの爆^は
ぜる乾いた音。

「昨日の山賊の頭領は、かつて黒騎を率いた風家の将、
‘ならず者’、ローグ・クーパーだ」

あつ、とレルガは声をあげそうになった。林昭も、もともと丸い
目をさらに大きく丸く見開いている。昨日カルマが見張りはいらな
いといったのはそういうわけだったのだ。おそらく今、この瞬間も
山賊たちはこの場を取り囲んでいるに違いない。その刃を内側では
なく外側に向けて。

「ただし、このことはいましばらくなかったことにしておいて欲
しい。俺がいいと思うまで、俺はただの風彪だ。クルーニーは昔、
悪事をはたらいていたころの仲間だ」

クルーニーというのは山賊の頭、ローグ・クーパーの‘本名’だ。
名前は明かしても正体はまだ明かさずにいるということらしい。そ
れでは、

「なぜこの場に俺を呼んだ」

今度は風彪がはつきりと、レルガに笑いかけた。

「お前にもいずればれると思ったからだ」

レルガは首をふった。ため息をつく。

「やっぱりお前は、ただもんじゃなかったってことか」

いつてからしまったと思った。もっと丁寧な口調で話すべきだっ
たか。

「構わん、俺はただの風彪だ」

顔に出てしまったらしい。うそをつくのは自分も苦手だ。

その後、一行が目的地、オストマルクについたのは、一週間後の
ことだった。

第6話：洞察（後書き）

『風雲の果て』へ続きます。
以下、これまでの登場人物

風彪ふうひゅう：神将、嬴洪えいこうの息子。武芸全般に通じる。最も得意とするのは弓。亡き父の形見である強弓、飛燕ひえんを手に風家軍の再興を目指す。
偽名、トラキア。

林昭りんしょう：風彪の弟子（？）。山奥の村を襲った流賊の一人。風彪に心酔して弟子入りを志願。未熟ながら風彪の指導により、天賦てんぷの才を開花させつつある。偽名、ラルフ。

鄭範ていはん：風彪に情報をもたらす間者の頭。大陸の情勢に通じる。偽名、シバス。

ローグ・クーパー：風彪たちを襲った山賊の頭。‘ローグ’はならず者を意味する通り名。かつて風家軍で重装騎兵の一団、黒騎兵を率いた。黒の甲冑に身を包み、大斧を得物とする。

王圭おうけい：安陽の鍛冶屋。伝説の名工、王隆おうりゅうの子孫。風鳴かざなりの剣を風彪に授ける。

穆累ぼくろい：王圭の店の番頭。

カルマ・カフカス：大商人。レルガの雇い主。オストマルクへ荷を運ぶ際に風彪と林昭を雇う。

レルガ：カルマの元で護衛を統率している。得物は大刀。燃えるよ

うな赤い髪から、赤髪鬼^{かくほし}の異名を持つ。

郭方^{かくほう}：カルマの護衛の一人。もと水銀商人。赤い衣を身にまとい、方天戟をふるう。

呂盛^{りよせい}：カルマの護衛の一人。薬師。白衣を身にまとい、方天戟をふるう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3669b/>

風のきざし

2010年10月10日11時17分発行